

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 環境科学科

職階 准教授

氏名 村山史世

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

環境科学科および全学部全学科の1・2年生向けの教養科目・導入科目を主に担当している。高校までの学修と専門科目の接続時期の学びを担当している。学生には広い視野と「学び方を学ぶ」ことを身につけてもらうのが、主たる役目となる。また衛生行政学やSDGsなど、専門知識をつなげて総合化する手法を考えてもらうことも教育的な責任である。

今年度から「SDGsと未来共生科学」に食品生命科学科1年次の履修も受け入れている。

ジェネプロ「SDGs Science Shop」で環境科学科2年生1人を受け入れている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
人権論	環境科学科	選択	1	73
法学入門	環境科学科	選択	1	80
SDGsと未来共生科学	環境科学科	選択	1	66
地球環境科学	環境科学科	必修	1	77
地球共生論	全学部・全学科	必修	1	562
日本国憲法	全学部・全学科	選択	1・2	119
地域コミュニティ論	環境科学科	選択	2	20
環境フィールドスタディ	環境科学科	選択	2	19
科学技術英語	環境科学科	選択	3	6
衛生行政学	環境科学科	必修	3	64
インターンシップ	環境科学科	選択	3	1
リサーチレーション	環境科学科	必修	2	73
卒業論文	環境科学科	選択	3・4	8・1
SDGsと未来共生科学	食品生命科学科	選択	1	17
SDGsと未来共生科学	環境科学科	選択	4	15
地球共生系データサイエンス・同演習Ⅰ	全学部・全学科	自由	2	30
科学者・研究者論	環境保健学研究科	必修	1	17

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

- ・学生を支援しても支配しないことを心がけている。私は大学院博士課程で指導教授からアカハラ・パワハラを受けた経験がある。指導教授は私を支配しようとした。その後アメリカに留学した時に指導教授は「君は何しにアメリカにきた？私は君にどんな何を支援できるのか？」と接してくれた。支援と支配に関して、私には恩師と反面教師がいる。
- ・学生の意欲を大切にする。意欲は学力の基盤、学ぶこと、生きることのエンジンであり、意欲があれば、学生は自ら学び続ける。
- ・学ぶ意欲につながるような学ぶことおよび学び合うことの楽しさと自己肯定感を学生に体験してもらう。
- ・学びは、教員が企て、学生が完成させる。この相互作用のコーディネートが教員の責任である。良い相互作用が生じる学習環境に気を配りたい。
- ・学生が卒業後も自立して生きてゆくためには、学び方を学ばせ、学生の興味・関心を尊重してゆきたい。
- ・講義は、学生が世界で生きてゆくための準備であり、手段である。講義を自己目的化するべきではない。
- ・学生が知識を習得する手段として問いと正解を設定しているのが教育の体系である。それは自然科学でも社会科学でも同様であるが、これらの学問体系が対象とする自然にも科学にも「正解」が存在するわけではない。現在の科学でも理解や解決ができないことが多い。そこで、教育において重要なのは「正解」を暗記させることでも、どこかにあるはずの「正解」をwebや生成AIを用いて安易に作成することでもない。それぞれの学生が「解」を求め「調べる」「考える」「構成する」「表現する」「対話する」過程を体験させることが重要である。このような過程を体験させることで、学生は私が担当する科目以外でも、授業外の調査研究や実生活でも科学的なリテラシーを活用できるようになると信じる。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

方針

- ・対面授業でも、オンライン授業でも、「共に学んでいること」を体験させる。
- ・相互評価や相互参照、対話を通じて、協同的な学びを実現する。
- ・学生が自分で問いを立てて、自分で調べ、自分で考えて、自分で回答を見つけて、理由を自分の言葉で表現できるように教員として支援してゆく。
- ・14回の講義が終わったのちに、学生に遺るものを考えて講義を構成する。
- ・大学で学んでいることと現実世界がつながっていることを学生に体感させる。

方法

- ・期末試験をやめて、毎回の出席課題と期末レポートで評価した。
- ・期末レポートの課題提示を授業開始後2か月半に行い、学生に学びの期間を確保した。
- ・授業は録画して、学生が復習できるようにした。

授業の資料について

- ・スライドはPDFにして学生が見返せるようにした。
- ・毎回の出席課題において、発問によって授業内容を振り返り、期末レポート等への準備ができるようにした。
- ・出席課題で出された学生の疑問や質問、意見に応えるような授業構成にした。
- ・現実の事件や事例などを授業の教材にして、現実世界とのつながりを意識してもらった。

授業の進め方について

- ・知識の一方的伝達だけを強調しないで学生が考えたり、調べたりするワークや時間を確保している。
- ・学生の発言や想いを拾い、学生と共に言語化をする。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

- ・環境フィールドスタディでは、ディスカッションの確保、調べものの学習や外部へのプレゼンテーションなどを行うPBLを実施した。
- ・今年度から地球共生論で図書館を実際に散策するワークを実施した。

(2) ICTの教育活用

有

- ・学理およびAzaMoodleで課題の相互参照が可能なようにさせている。
- ・Geographicaを活用したGISアプリでの実習を取り入れている。
- ・Googleフォームを活用した双方向的な対話を取り入れている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

毎回の出席課題の相互参照はしなくなった。AzaMoodleではできないこと、また他人の課題を丸写しする学生もいることが主な理由である。これに代わる共同的な学びの時間は確保できていない。

（２）学生の理解度の把握

B

毎回の出席課題で学生の認識を確認しているが、多くの誤解が生じている。次回の授業で解説を行っているが、十分かどうかは確証がない。

（３）学生の自学自習を促す工夫

B

授業で触れた資料や、さらなる学習のための手がかりを示しているが、学生が取り組んでいるかどうかは定かでない。

（４）学生とのコミュニケーション

A

毎回の出席課題では、全員の学生にコメントを付している。

（５）双方向授業への工夫

A

毎回の出席課題での学生の声を拾って授業を展開したり、Googleフォームでの学生のコメントに応答したりしている。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

毎回の課題が多いとの意見が多かったので、設問を5問から4問にした。

(2) (1) の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

設問を減らしても、課題が多いという声はある。

(3) (2) を踏まえた次年度の取組

これ以上設問を減らすつもりはない。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

毎回の出席課題で、学生の主張を感じられない気味の悪い回答が増えた。「今回は※※を学びました」のような定型的なものの言い方、表面的な知識を並べているだけの記述など、その場限りの「正解」と思われていることを記述しているような印象がある。これは今年度特に印象に残ったことである。具体的にどうすれば良いかについてのアイデアはない。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

まだ取り組めていない。しかし、教員相互では同様の印象を持っていることが確認できた。今後の課題である。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

・教務課主催のFDへの出席率は、昨年度よりも下がった。授業数が増えた今年度は、FDへの参加自体が負担に感じた。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

- ・短期的には学生の満足度をあげたい。
- ・そして、「気持ち悪い課題」を減らすために、学生と学びの意味について対話をするとともに、「調べる」「話す」「書く」技術をともなった思考と表現と対話の技術を高めたい。
- ・中期的には、協同学習につながるような、教育手法を開発してゆきたい。
- ・また、知識の伝達だけでなく、学生が学びを楽しめるための手法の開発をしてゆきたい。
- ・自らは、ファシリテーターとしての技量をもっと豊かにしてゆきたい。
- ・長期的には、暗記力では評価できないような知識の定着と評価方法を試みたい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

シラバス。学理にアップした動画、教材、出席課題。学生のプレゼンテーション動画。